



## 縄文村講演会『縄文とアイヌ』開催。

12月18日(日)、東松島市コミュニティセンターで、『縄文とアイヌ』と題した講演会を開催しました。縄文村講演会で「アイヌ」を取り上げるのは初めて。市内をはじめ、県内外から定員を超える約160名が集まり関心の高さがうかがえました。

講師には、関根達人氏(弘前大学教授)、奈良貴史氏(新潟医療福祉大学教授)をお招きし、アイヌの人びとの生業や交易、人類学的に見た骨の特徴から、縄文人とアイヌのつながりに迫るお話をしていただきました。



熱心にメモを取り、聞き入る聴講者



▲関根達人氏

関根氏は『縄文人とアイヌの生業』と題し、講演。アイヌの人びとは生業の基盤は農業ではなく、交易が基盤で、和人との交易を前提とした狩猟・漁労・採集民であったことを明らかにしました。

アワビやサケ・タラ(干魚)、アザラシ・アシカ・トド(毛皮)、クマ(毛皮・胆のう)、ワシ・タカ(羽)、エゾシカ(毛皮)などの交易品やそれらを獲るための道具、伝世する様々な工芸品などが紹介されました。また、縄文人と1200年もの年月を隔ててもなお共通する、狩猟採集

民としての精神性などについても話され、大変興味深いお話に会場からは驚きと感心の声が聞かれました。

奈良氏は『縄文人はどこに行った』と題し、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代、近世アイヌの人びとの顔の特徴についてお話いただきました。とくに、特徴が大きく異なる縄文人骨と弥生人骨について詳しく説明され、その後どのように本土日本人・アイヌ・琉球人が形作られていったのか、大変わかりやすく解説していただきました。そして、和人が描いたアイヌの絵と近世アイヌの骨に、「縄文人に近い顔立ちとその特徴」が見られるという興味深いお話を聞くことができました。



▲奈良貴史氏

### アンケートから

- ・アイヌの人々が交易を行っていたということを初めて知って驚いた。
- ・狩猟採集という観点からの縄文と(精神的な)つながりがあるという話はとても興味深かったです。
- ・日本に3つの文化圏があり、アイヌと琉球は交易が中心となっているというお話はとても納得ができ、素晴らしい考え方だと感じました。
- ・眼窩等の形態で、ここまで縄文・弥生・中間の違いが分かることは驚きです。
- ・人骨を通して考える縄文人の様子はとても興味深く話を聞くことができました。

## ■ 土日体験 ■

完全予約制に変更していた「土日体験」ですが、通常通り「予約不要」に戻りました。冬のおでかけにぜひご来館ください。受付時間・メニューは以下のとおりです。

### 【受付時間】

9:00 ~ 11:00/13:00 ~ 15:00

### 【体験できるメニュー】

まがたま作り・シカ角ストラップ  
(各400円)※別途入館料もかかります  
※火おこしは休止中(12~3月)

## ■ SNS、やっています。 ■

縄文村のFacebook・Instagramがあるのをご存じですか? イベント等の最新情報、縄文村の日常など日々更新しています。ぜひチェックしてみてくださいね! そしてお気軽にフォローしてください。



Facebook



Instagram

／ FOLLOW ME!! \

もともとは野蒜新町の立石地区にあったものとみられますが、東日本大震災後の復興工事中に、鳴瀬川対岸の浜市地区の野蒜築港跡の草むらの中から発見されました。縦66cm、横約3mの粘板岩(井内石)製の横長の碑で、震災の津波によるものか真っ二つに割れた状態で見つかりました。この石碑が建てられたのは大正3(1914)年11月11日。碑文には、水門改築の理由として、①国家の発展のために農業の安定的生産が必要で、その安定の継続には治水や土木事業が重要であること、②当時の立石水門は木造だったため洪水のたびに壊れ、周辺の広大な田畑に冠水被害が相次いだことが記されています。改築に



### 「立石水門改築記録」が市指定文化財に

このたび「立石水門改築記録」が市の有形文化財(歴史資料)に指定されました。この碑は、東名運河に農業水利用のために設置された立石水門の改築を記念して建立された

もので、あつたものは野蒜新町の立石地区にあり、東日本大震災後の復興工事中に、鳴瀬川対岸の浜市地区の野蒜築港跡の草むらの中から発見されました。縦66cm、横約3mの粘板岩(井内石)製の横長の碑で、震災の津波によるものか真っ二つに割れた状態で見つかりました。この石碑が建てられたのは大正3(1914)年11月11日。碑文には、水門改築の理由として、①国家の発展のために農業の安定的生産が必要で、その安定の継続には治水や土木事業が重要であること、②当時の立石水門は木造だったため洪水のたびに壊れ、周辺の広大な田畑に冠水被害が相次いだことが記されています。改築に

また、工事関係者として、野蒜村三役や村会議員、地元土木委員や区長、設計者、監督者(県・桃生郡・村職員)、工事請負人の氏名、工期、事業費(碑の欠損により一部不明)等についても詳細に記されています。石碑が建てられた前年の大正2年は、高潮、大暴風雨による海岸部の被害が甚大だったと伝えられており(大正海嘯といわれる)、これが水門の改築と石碑建立の理由となったのではないかと推測されます。これまで石碑の存在は知られておらず、水門の設置や改築に係る資料も残っていません。そして、なぜ水門の傍ではなく対岸の浜市地区で見つかったか、その経緯についてはわかりませんが、東日本大震災後に見つかった100年以上も前の災害の記録。過去の災害の歴史を忘れないことの重要性を語りかけているように思えます。今後、市指定文化財として保存し、多くの方々に見ていただけるよう、設置場所等について検討してまいります。

たていしすいもんかいちゆうき

あつたつては、当時の野蒜村後藤亀之丞村長(野蒜村4・7・9代村長)が事業を興し、県の補助金を受けて、熟練した技術者の設計により完全な石造の水門に改築したことが記されています。